P-26

日本語の動詞句分裂文と動詞句前置の統語的共通点

藤巻一真（神田外語大学）

要旨

岸本（2016)に、「こと」による名詞化を用いて、日本語においても動詞句(vP)を焦点とする疑似分裂文（以下、動詞句分裂文）が可能であり、その時、「の」節に VP 内にある要素（目的語の「を」格など）が残れないという重要な観察がある。また、藤巻（2024)に取り立て詞の「など」を用いた動詞句分裂文と動詞句前置が可能であるという観察がある。本発表では、「など」を用いた動詞句分裂文においても、岸本(2016)の観察が再現されることを示す。次に、動詞句前置において、動詞句の外に残れない要素があるが（Hoji et al.（1989)、Yatsushiro（1999))、この観察も「など」の動詞句前置において再現されることを示し、動詞句分裂文の「の」節に残れない要素と、動詞句前置において動詞句の外に残れない要素は共通していると論じる。この共通点を捉える分析として、藤巻（2024)で示唆された動詞句分裂文の分析（Hasegawa（1997,2011)および Hiraiwa and Ishihara（2002)の分裂文の分析に、動詞句前置を組み込んだ分析）に基づき２つの可能性を検討する。

1. 岸本(2016)の疑似分裂文の観察

岸本（2016)によると、日本語において(1a)のように「こと」による名詞化により、動詞句が疑似分裂文の焦点位置に現れることができる。この時、「こと」の前の動詞の形は「る」形であり、(1b)のように「た」形にならない。また、(1c)が言えないことから、長谷川（1990)を仮定して「する」は動作主を主語に取る本動詞であり、(1d)のように「こと」節は PRO を含むとされる。

(1) a.　[彼がした]のは[本を読む]ことだ。
　　b. *[彼がした]のは[本を読んだ]ことだ。
　　c. *[雨がした]のは［降る］ことだ。
　　d.　$[_{CP}$ OP_j $[_{TP}$ 彼が$[_{vP}$ t_j し]た]のは] $[_{vP}$ PRO 本を読む$]_j$ことだ。　（岸本（2016))

そして、(2)のように「の」節に VP 内の要素である、目的語の「を」格、起点の「に」格や「から」格が残れないという重要な観察がある。(以下の例の強調は筆者付加)

(2) a. *[彼が**本を**した]のは[読む]ことだ。
　　b. *[彼が**子供{に／から}**した]のは[本をもらう]ことだ。　（岸本（2016))

「に」格については、一見、(3a)のように「の」節に残れるように見えるが、それは「の」節の動詞である「する」が取る受益者であるとされ、基本的には有生物に限られ(3b)は容認されないとされる。ただし、岸本（2016)の註 18 にあるが、(3c)のように無生物名詞句でも「何らかの行為の結果の恩恵を受けるのであれば（p. 139)」容認性が上がるとされる。

(3) a.　[お母さんが<u>子供に</u>した]のは[本を与える]ことだ。
　　b. ?*[彼がこの作品にした]のは[満点を与える]ことだ。
　　c. ?[彼がこの机にした]のは[引き出しをとりつける]ことだ。　（岸本（2016))

2. 「など」を用いた動詞句分裂文の「の」節に残れない要素

2.1. 「など」を用いた動詞句分裂文

1 節の岸本（2016)の「こと」による名詞化を用いた場合と同様に、藤巻（2024)には取り立て詞の「さ

え」と同類の「など」を用いた場合に、(4a)のように動詞の形が「る」形の場合に動詞句を焦点とする分裂文（以下、動詞句分裂文と呼ぶ）が可能であるという観察がある。(4b, c)のように、連用形や「た」形の場合は、動詞句分裂文は不可能である。本稿では、「に」格と「を」格の両方が現われる３項動詞を中心に見ていくので、(5)のような例を用いることにする。

(4) a.　太郎がそこでしたのはコーヒーを飲むなどです。　「る」形
　　b. *太郎がそこでしたのはコーヒーを飲みなどです。　連用形
　　c. *太郎がそこでしたのはコーヒーを飲んだなどです。　「た」形　（藤巻（2024））
(5) a. 太郎がしたのはバナナを箱に入れるなどです。
　　b. 太郎がしたのはリンゴを皿に置くなどです。

2.2.　「など」を用いた動詞句分裂文の「の」節に残れない要素

以下、岸本（2016）の「の」節に関する観察が、「など」を用いた動詞句分裂文において再現されることを確認する。まず、(6)のように「を」格が「の」節に残ることができない。

(6) a. *太郎がバナナ**を**したのは箱に入れるなどです。　「を」格（～を…に）
　　b. *太郎がリンゴ**を**したのは皿に置くなどです。

次に「に」格については、まず、(7)のようにVP内にある「を」格より構造的に下にあると考えられる「に」格は、「の」節に残ることができない。

(7) a. *太郎が箱**に**したのはバナナを入れるなどです。　「に」格（～を…に）
　　b. *太郎が皿**に**したのはリンゴを置くなどです。

一方で「に」格でも、Miyagawa and Tsujioka (2004)において「を」格より構造的に上にあるとされるものは、(8b)のように「の」節に残ることが可能である。「手を入れる」は「手を太郎が花子の論文に入れた」と言えないことから固定性の高い慣用句であり構成素を成し、(8b)では動詞句の一部が「など」と共に焦点位置に現れている。(8c)において「を」格が残れないのは、固定性の点からも説明できる。

(8)　a.　太郎が花子の論文に手を入れるなどした。
　　b.　太郎が花子の論文**に**したのは手を入れるなどです。　「に」格（～に…を）
　　c. *太郎が手**を**したのは花子の論文に入れるなどです。　「を」格（～に…を）

(9)の「～にケチをつける」は、「ケチを太郎が花子の論文につける」とも言え、固定性の低い慣用句である。この場合も、(8)と同様に、「～にケチをつける」における「に」格は「の」節に残れるが、「を」格は「の」節に残れない。

(9)　a.　太郎が花子の論文にケチをつけるなどした。
　　b.　太郎が花子の論文**に**したのはケチをつけるなどです。　「に」格（～に…を）
　　c. *太郎がケチ**を**したのは花子の論文につけるなどです。　「を」格（～に…を）

確認として２項動詞における「に」格の場合も見ておく。(10)のように「の」節に「に」格の補部は残れない。VP内にある要素は「の」節に現れないという岸本（2016)の観察と同様である。

(10) a. *太郎が花子にしたのは喫茶店で会うなどだ。
b. *太郎が花子にしたのはそれに関して従うなどだ。

以上をまとめると以下のようになる。ここでは、後の議論のために、「の」節にある要素が残れない理由をR1としておく。

(11) a. 「を」格は「の」節に残れない。(6), (8c), (9c)
b. ２項動詞の「に」格も「の」節に残れない。(10)
c. ３項動詞の内項のうち、「を」格より構造的に下の「に」格も「の」節に残れない。(7)
d. ３項動詞の内項のうち、「を」格より構造的に上の「に」格は「の」節に残れる。(8b), (9b)

3. 「など」を用いた動詞句前置において前置される動詞句の外に残れない要素

3.1. 先行研究における前置される動詞句の外に残れない要素

この節では、動詞句前置において、前置される動詞句の外に残れない要素を確認する。まず、Hoji et al. (1989) は、(12)の例を挙げ、動詞句全体を前置できる一方で、その一部を前置できないとしている。(強調は筆者付加)

(12) a. [$_{VP}$ 寿司を食べ]さえ$_i$ ジョンが t_i した
b. *食べさえ$_i$ ジョンが [$_{VP}$ **寿司を** t_i] した
c. *[寿司を置き]さえ$_i$ ジョンが [$_{VP}$ **その皿に** t_i]した (Hoji et al. (1989))

この(12b)は、動詞句の一部である「を」格の目的語を動詞句の外に残して、動詞句を前置することができないとも解釈できる。(12c)についても、「を」格より下の「に」格を動詞句の外に残して、動詞句の一部を前置できないと解釈できる。

次にYatsushiro (1999)には、(13a, b)のように「～に～を」における「に」格は前置される動詞句の外に残して動詞句を前置できるが、「を」格はそれができないという観察がある。また、(13c)のように２項動詞の内項の「に」格も、「を」格と同様に前置される動詞句の外に残して動詞句前置ができないとされる。

(13) a. エリカを紹介しさえカイが**ウリに**した。 ３項動詞における「に」格 (～に…を)
b. *ウリに紹介しさえカイが**エリカを**した。 ３項動詞における「を」格 (～に…を)
c. *会いさえツトムが**カイに**した。 ２項動詞における「に」格 (Yatsushiro (1999))

Yatsushiro (1999)は、「～に～を」を基本語順とすることを主張し、(14)の構造を与えて、それぞれの項に対して主要部になる動詞があるとしている。「に」格が残れる(15a)ではVP3が前置される。「を」格が残れない(15b)では、「に」格の下にある「を」格が前置される動詞句(VP2)の外に移動し、その後VP2が前置される。その時、VP3に「を」格の痕跡があり、その痕跡がFiengo (1977)の適正束縛条件(PBC)に違反するとされる。((14)はYatsushiro (1999)のツリーを括弧で示し、一部日本語を入れて改変し、(15)は矢印を省いてある。)また、Yatsushiro (1999)では更に論を進めて、かき混ぜにおける素性を仮定し、Rizzi (1990)の相対的最小性(Relativized Minimality)から(13b)はそもそも派生されないと議論している。ここではどちらが正しいかの議論はせず、(13b)が非文である理由をR2としておく。

(14) [$_{IP}$ ... [$_{VP1}$ Subject (～が) [$_{VP2}$ IO (～に) [$_{VP3}$ DO (～を) V3] V2] V1] I]
(15) a. [$_{VP3}$ エリカを 紹介しさえ]$_i$ [カイが [$_{VP1}$ [$_{VP2}$ ウリに t_i]]した]

b. [$_{VP2}$ ウリに [$_{VP3}$ t_i 紹介しさえ]]$_j$ [カイが [エリカを$_i$ t_j]した] (Yatsushiro (1999))

3.2. 「など」を用いた動詞句前置

取り立て詞の「など」は「さえ」とは異なり、(16a)のように動詞の「る」形と連用形の両方に付加することができる（寺村 (1991)）。(「さえ」の場合「飲むさえした」とは言えない。)

(16) a. 太郎がそこでコーヒーを｛飲**み**／飲**む**｝などした。 連用形＋など／「る」形＋など
b. *太郎がそこでコーヒーを飲ん**だ**などした。 「た」形＋など

ここでは、動詞句前置と動詞句分裂文との関係を見るので、動詞句分裂文が可能な「る」形に「など」が付加する場合を中心に見ていく。((4b)のように連用形では動詞句分裂文が作れない。つまり、「さえ」では動詞句分裂文は作れない。) まず、(17)のように「など」の場合も動詞句前置が可能である。

(17) バナナを箱に入れる**など**太郎がした。

3.3. 「など」を用いた動詞句前置において前置される動詞句の外に残れない要素

この節では、前述の Hoji et al. (1989)と Yatsushiro (1999)における観察が「など」を用いた動詞句前置においても再現されることを確認する。

まず、固定性の高い慣用句において動詞句前置が可能である。「手を入れる」は動詞句の一部であり構成素を成す。この場合、(18b)のように「を」格より構造的に上の「に」格は前置される動詞句の外に残ることができる。(18c)のように「を」格は前置される動詞句の外に残れないが、それは慣用句の固定性からも説明が可能である。

(18) a. 太郎が花子の論文に手を入れるなどした。
b. 手を入れるなど太郎が花子の論文**に**した。 「に」格（～に…を）
c. *花子の論文に入れるなど太郎が手**を**した。 「を」格（～に…を）

(19)は固定性の低い慣用句を用いた例である。この場合も、(18)と同様の振る舞いとなるが、(19c)が非文である理由は、慣用句の固定性ではなく、動詞句前置において「を」格を前置される動詞句の外に残せない理由（R2）となる。

(19) a. 太郎が花子の論文にケチをつけるなどした。
b. ケチをつけるなど太郎が花子の論文**に**した。 「に」格（～に…を）
c. *花子の論文につけるなど太郎がケチ**を**した。 「を」格（～に…を）

また、「を」格より下にあると考えられる「に」格は(20b)のように前置される動詞句の外に残れない。

(20) a. 太郎がバナナを箱に入れるなどした。
b. *バナナを入れるなど太郎が箱**に**した。 「に」格（～を…に）
c. *箱に入れるなど太郎がバナナ**を**した。 「を」格（～を…に）

確認となるが、(21)のように、２項動詞の「を」格を前置される動詞句の外に出すと非文となるが、付加詞は問題がない。また、(22c)のように２項動詞の内項の「に」格についても Yatsushiro (1999)の観察と同様に、「など」を用いても、それを前置される動詞句の外に残して動詞句前置はできない。

(21) a.　太郎がそこでコーヒーを飲むなどした。
　　b.　コーヒーを飲むなど太郎がそこでした。
　　c. *そこで飲むなど太郎がコーヒーをした。
(22) a.　太郎が喫茶店で花子に会うなどした。
　　b.　花子に会うなど太郎が喫茶店でした。
　　c. *喫茶店で会うなど太郎が花子にした。

以上をまとめると以下のようになる。

(23) a.「を」格は前置される動詞句の外に残れない。(18c), (19c),(20c), (21c)
　　b.　２項動詞の「に」格も前置される動詞句の外に残れない。(22c)
　　c.　３項動詞の内項のうち、「を」格より構造的に下の「に」格も外に残れない。(20b)
　　d.　３項動詞の内項のうち、「を」格より構造的に上の「に」格は外に残れる。(18b), (19b)

4. 動詞句分裂文と動詞句前置の共通点と両者を結び付ける分析の可能性

4.1. 動詞句分裂文と動詞句前置における共通点

以上、(11)と(23)でまとめたことから、動詞句分裂文における「の」節に残れない要素 (X) と、動詞句前置において前置される動詞句の外に残れない要素 (Y) は共通していると言える。そこで、それぞれの理由を R1 と R2 と仮にしてきたが、R1 と R2 が同じなのではないかという疑問が生じる。

(24) a. 動詞句分裂文の「の」節に残れない要素(X)とその理由(R1)
　　b. 動詞句前置において、前置される動詞句の外に残れない要素(Y)とその理由(R2)
(25) X は Y である。そうすると R1 は R2 なのではないか。

4.2. 動詞句分裂文と動詞句前置を結び付ける分析の可能性１

ここでは動詞句分裂文と動詞句前置を結びつける分析（藤巻 (2024)）を取り上げる。先ず名詞句を焦点とする分裂文の分析として、Hasegawa (1997, 2011)や Hiraiwa and Ishihara (2002)の分析を採用する。例えば、「太郎が食べたのはバナナをだ」は、概略、以下のようになる。出発は(26a)の「…のだ」文であり、その「の」節から焦点になる句（「バナナを」）を(26b)のように、FocP の指定部に移動する。その後「の」節 (FinP) がその内部の要素と共に話題化され、(26c)のように TopP の指定部に移動する。（文構造は Rizzi (1997)を仮定する。便宜上、痕跡を用いる。また、$[_{FinP}\ \ ]_j$などは移動元を表す。）

(26) a. [太郎がバナナを食べた]のだ　　「…のだ」文
　　b. $[_{FocP}$ バナナを$_i$ $[_{FinP}$ 太郎が　t_i 食べたの] だ]　　焦点化
　　c. $[_{TopP}$ $[_{FinP}$ 太郎が　t_i 食べたの$]_j$ は　$[_{FocP}$ バナナを　$[_{FinP}\ \ ]_j$　だ]]　　話題化

藤巻 (2024)において動詞句分裂文の分析として、(26b)の名詞句が FocP の指定部に移動する段階で、(27b)のように動詞句前置を組み込み、動詞句を FocP の指定部に移動する可能性が示唆されている。(尚、藤巻 (2024)では、「る」形は Rizzi (1997)の精緻化された文構造の TP に相当するとされる。)

(27) a. [$[_{FinP}$ 太郎が $[_{TP}$ バナナを食べるなど] したの] だ]　　「…のだ」文
　　b. [$[_{FocP}$ $[_{TP}$ バナナを食べるなど$]_i$ $[_{FinP}$ 太郎が $[_{TP}\ \ ]_i$ したの] だ]]　　**動詞句の焦点化**
　　c. $[_{TopP}$ $[_{FinP}$ 太郎が $[_{TP}\ \ ]_i$ したの$]_j$は　$[_{FocP}$ $[_{TP}$ バナナを食べるなど$]_i$ $[_{FinP}\ \ ]_j$だ]]　話題化
（藤巻 (2024)）

この分析を採用すると、動詞句分裂文の派生における初期段階において、(27b)のように動詞句前置が起こることになる。(28)は、その動詞句前置の前に「ケチを」が VP3 から VP2 の外に移動し、その後、その「を」格の痕跡がある VP3 を含む VP2 が前置されることになる。この VP2 の移動が R2（仮に PBC 違反）により不可能であることから、(29b)の動詞句前置の文は非文となり、その後の(29c)の動詞句分裂文も非文となると説明される。(30)は、(31b)のように Yatsushiro (1999)の VP の内、一番下の VP3 が痕跡を含むことなく前置され、この問題は起こらないということになる。

(28)(=(9c)) *太郎がケチ**を**したのは花子の論文につけるなどです。
(29) a. ［太郎が花子の論文に**ケチを**つけるなどしたの]だ。
b. *[[$_{FocP}$ [$_{VP2}$ 花子の論文に [$_{VP3}$ t_i つけ]るなど]$_j$ [$_{FinP}$ 太郎が **ケチを** $_i$ [$_{VP2}$]$_j$ したの] だ]]
c. *[$_{TopP}$ [$_{FinP}$ 太郎が**ケチを** $_i$ [$_{VP2}$]$_j$ したの]$_k$ は [$_{FocP}$ [$_{VP2}$ 花子の論文に [$_{VP3}$ t_i つけ]るなど]$_j$ [$_{FinP}$]$_k$ だ]]
(30)(=(9b)) 太郎が花子の論文**に**したのはケチをつけるなどです。
(31) a. ［太郎が**花子の論文に**ケチをつけるなどしたの]だ。
b. [[$_{FocP}$ [$_{VP3}$ ケチをつけるなど]$_j$ [$_{FinP}$ 太郎が **花子の論文に** $_i$ [$_{VP3}$]$_j$ したの] だ]]
c. [$_{TopP}$ [$_{FinP}$ 太郎が**花子の論文に** $_i$ [$_{VP3}$]$_j$ したの]$_k$ は[$_{FocP}$ [$_{VP3}$ ケチをつけるなど]$_j$ [$_{FinP}$]$_k$ だ]]

この分析においては、2 つ問題が残る。ひとつは、(31b)においては、痕跡を含まないように VP3 を前置することを保証しなければならない点である。もうひとつの問題は、移動された VP が VP2 であれ VP3 であれ、「など」を用いた動詞句前置は、動詞の形が「る」形を取る点にある。(Yatsushiro (1999)の動詞句前置においては、「さえ」を用いているので、VP2 を移動しようと、VP3 を移動しようと、動詞の連用形になる。）例えば(31b)のように、動詞句前置において FocP の指定部に移動する VP3 と、その形態（「る」形）の関係がずれるというミスマッチの問題が生じている。

4.3. 動詞句分裂文と動詞句前置を結び付ける分析の可能性２

もうひとつの可能性としては、藤巻 (2024)のように「る」形の TP が前置されるとした上で、「する」に関して岸本 (2016) の分析を採用し、「の」節の「する」が受益者の「に」格を取るとするのがある。この時、「する」は「る」形の TP を補部に取ると仮定する。

(32)(=(9b)) 太郎が花子の論文**に**したのはケチをつけるなどです。
(33) a. [[[$_{FinP}$ 太郎が $_i$ [$_{vP}$ t_i **花子の論文に** $_j$ [$_{TP}$ PRO$_i$ pro$_j$ ケチをつけるなど]し]たの]だ]]
b. [[$_{FocP}$ [$_{TP}$ PRO$_i$ pro$_j$ ケチをつけるなど]$_k$ [$_{FinP}$ 太郎が $_i$ [$_{vP}$ t_i **花子の論文に** $_j$ [$_{TP}$]$_k$ し]たの] だ]]
c. [$_{TopP}$ [$_{FinP}$ 太郎が $_i$ [$_{vP}$ t_i **花子の論文に** $_j$ [$_{TP}$]$_k$ し]たの]$_l$ は[$_{FocP}$ [$_{TP}$ PRO$_i$ pro$_j$ ケチをつけるなど]$_k$ [$_{FinP}$]$_l$ だ]]

この場合、(33b)のように「る」形に対応する TP が移動するのでミスマッチの問題は起こらない。そして「の」節に「に」格が可能な場合、その「に」格は「の」節の「する」が取る受益者であるということになる。((4a)と(21b)(22b)の付加詞のデータについても、本動詞の「する」が選択する付加詞となる。）仮に「を」格を TP の外に移動してから TP を前置するとその痕跡が残り、R2（PBC 違反）により、その前置の文は非文となる。その結果、「を」格を「の」節に残した動詞句分裂文も非文となる。

ただし、この場合、焦点位置にある動詞句には PRO 以外に、「の」節の「に」格が束縛する pro の想定が必要となり、この束縛を保証する必要がある。(Yatsushiro (1999)でも、動詞句前置の分析において同様の問題が指摘され、「する」が「に」格を取り、「さえ」が付加する動詞句において PRO を２つ仮

定する場合、「が」格と「に」格の先行詞が正しく２つの PRO を束縛できるのかという問題が指摘されている。）

どちらの可能性を取るにしても、FocP の指定部へ移動した句（(31c)における VP3、または(33c)における TP）の痕跡を含む句（FinP）の TopP の指定部への移動は、(26c)と同様に認めることになる。

5. 結語

本稿では、岸本（2016)の「こと」による名詞化を用いた動詞句分裂文の観察を出発点として、「など」を用いた動詞句分裂文と「など」を用いた動詞句前置における統語的特徴を観察し、両者が共通していることを示した。そして、この共通点を捉える分析として、動詞句分裂文の派生の一部に動詞句前置を組み込んだ分析（藤巻（2024)）を用いて、２つの可能性を提示し検討した。ただし、これらの分析には技術的な問題点が残っているので、それらは今後の課題とする。

謝辞

本研究を推進するにあたって、長谷川信子氏、石居康男氏、栗原和生氏、大倉直子氏、外崎淑子氏、上田由紀子氏から貴重なご意見とご批判をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。もちろん、本稿における誤りなどの責任は全て筆者にある。本研究の一部は、神田外語大学言語教育研究所の研究助成を受けて実施されたものである。

参照文献

Fiengo, Robert (1977) “On Trace Theory,” *Linguistic Inquiry* 8, 35-61.

藤巻一真 (2024)「「など」を用いた分裂文と動詞句前置」『言語教育研究』第 34 号, 51-91, 神田外語大学言語教育研究所, 神田外語大学.

長谷川信子(1990) “On the VP Internal Subject Hypothesis,” 『日本語教育国際シンポジウム報告書』, 坂本正・阿部泰明（編）, 南山大学.

Hasegawa, Nobuko (1997) “A Copula-Based Analysis of Japanese Clefts: *Wa*-Cleft and *Ga*-Cleft,” *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, Grant-in-Aid for COE Research Report (1), 15-38, Kanda University of International Studies.

Hasegawa, Nobuko (2011) “On the Cleft Construction: Is It Simplex or Complex?” *Scientific Approaches to Language* 10, 13-22, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2002) “Missing Links: Cleft, Slucing and “*No da*” Construction in Japanese,” *The Proceedings of HUMIT 2001, MIT Working Papers in Linguistics* 43, ed. by Tania Ionin, Heejeong Ko, and Andrew Nevins, 35-54, MIT.

Hoji, Hajime, Shigeru Miyagawa, and Hiroaki Tada (1989) “NP Movement in Japanese,” Ms.

岸本秀樹 (2016)「文の構造と格関係」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介（編）『日本語文法ハンドブック―言語理論と言語獲得の観点から―』, 102-145, 開拓社, 東京.

Miyagawa, Shigeru and Takae Tsujioka (2004) “Argument Structure and Ditransitive Verbs in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 13: 1-38.

Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minamality*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版, 東京.

Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*, Doctoral Dissertation, University of Connecticut.